

〈 概念のまとめ〉

● 商品

commodity \iff 行「商」 「あきなふ」

・「商品」にはならない(なりにくい)もの

● 価格と価値

「価値の理論」ということ(教科書 p.35) 価値付けの一意性、恣意性、不可能性

・商品空間と価格空間(ベクトル空間・座標系ということ: 物質を精神から切り離した二元論)

● 消費と生産

消費者問題

生産者問題 (耐久資本財の記述・企業の目的関数)

・ミクロ経済学的世界観(上記のような「合理」性による把握)

・数学的議論の意義(学問とは何か 真理とは何か: 大陸哲学と分析哲学(ラッセル・ウイトゲンシュタイン) 二元論 → 東洋的一元論(西田『善の研究』) プラグマティズム(W.ジェイムズ) ベルクソン ゲーデル 構造主義とポスト構造主義(ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』J.デリダ『グラマトロジーについて』))

■ミクロ経済学■ 3 : 日付と出来事・市場・貨幣

* 教科書 浦井・吉町 (2012) 第1章 基礎的概念 p.43~p.58

【1】日付と出来事 (Date-Event)・市場構造

ここまで述べた「商品」の体系を、日付と出来事という観点からもう少し詳しく見てみよう。現在時点においては現在の出来事が1つ定まっているとする。そして明日以降の時点においては、可能性として複数存在しており、我々の商品の意味に大きく影響を与えるような、異なる出来事の在り方が、前もって想定されているものとする。例えば晴れて気温が高い時と雨で低いときで冷たいジュースや傘の満足度が異なるであろう。あるいは風邪が流行しているときとしていないときではマスクの重要性が異なるだろう。そういう意味で、その物的性質、利用場所、日付が同一であったとしても人間にとってその意味を全く変えてしまうような各時点での環境の違い、それを出来事 **event** の違いと呼ぶのである。⁵ 目下考慮の対象としている期間が、今期から数期にわたるものとする。(別に無限期でも構わないが、ここでは単純化のため有限期としておく。) このとき、1つの状態 **state** とは、今期からその議論の対象とする数期にわたり、上に述べたような「(現在考慮の対象となっている数期にわたる)出来事 event がどのように移り変わるか」という、いわば「出来事の歴史の1つの在り方」のことである。これを図で表すため、Figure 1 のような tree を考える。

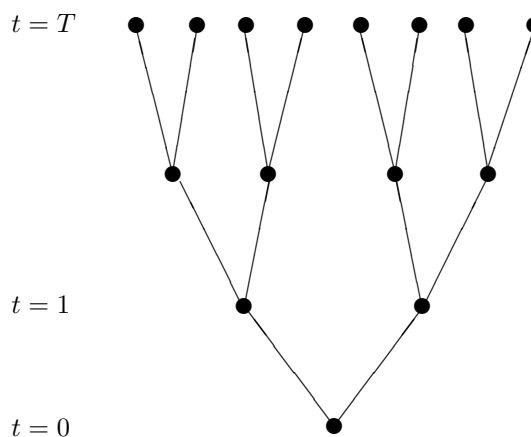


Figure 1: Event Tree

縦方向は日付を表し、黒丸が一つの「日付+出来事」date-eventを表す。各黒丸からの枝別れは、各date-eventで見た次の期の可能な出来事eventの数(簡単のため有限とし、図では特に各日付の移り変わりごとに2としてある)を表す。最終的な枝別れの数(図では、最終期である T 期における本数である8本)がstateの数である。⁶

⁵出来事eventの違いは、主体にとって(通常の経済学理論上)天から与えられたものとして取り扱うのが普通(例えば天候など自然現象に代表されるような要因に用いるのが普通)で、経済モデルを構成するいずれかの主体の自由意志に依存するようなものに用いられること(例えば、ある主体が自分のこれからとる行為についての情報をリークした場合としない場合、のようなこと)は無い。(つまり、誰かが故意に情報操作を行うような問題は、通常のdate-event的問題設定の範疇には無い。)もっとも「自然」がどこまで「自由」がどこまでということに線が引けるのかという根本的問題は残る。ある意味で人間も自然の一部である。

⁶各枝に s_1, s_2, \dots, s_8 と名前をつける(つまり各stateに名前をつける)と、 $S = \{s_1, s_2, \dots, s_8\}$ がstateの全体を表す集合である。上に行ったようなeventからstateという話の順序を逆にして、まず異なる状態stateが存在(上で言うと8種類)して、eventというのは、そのstate一つの部分集合を表すという言い方もできる。例えば $t=1$ 時点での左側のeventは $\{s_1, s_2, s_3, s_4\}$ というstateの集合であるという言い方である。(数学的にはむしろこちらの方が普通である。)

抽象的な言い方をすれば、state の集合(図で言えば、枝のまとまり) を event と呼ぶ。枝別れの根元の黒丸は、各日付における可能な外的要因の有り方を表しているが、これを state のまとまり (つまり event) として見ることができよう。したがって、各黒丸に日付と event で名前をつけることができる。以後、各黒丸を、date-event (t, A) 、(ただし、 t は日付を、 $A \subset S$ は event をそれぞれ表す) などと呼ぶことにする。例えば date-event $(1, \{s_1, s_2, s_3, s_4\})$ でもって、図の下から 2 段目の左側の黒丸を表す。

商品の特徴付ける際に、(特徴、場所、日付) でなく、(特徴、場所、date-event) でもってしたもの、特に条件付き商品 (**contingent commodity**) と呼ぶ。このように商品の概念を拡張することによって、通常の (条件付きでない) 商品概念にもとづいて行われた議論 (例えば Debreu (1959), Ch.3 – Ch.6) や結論を、そのまま条件付き商品の世界にあてはめ、そのいくつかの議論を利用することが可能となる。(c.f. Debreu (1959), Ch.7)。例えば「競争均衡は Pareto-optimal な資源配分状態を導く (厚生経済学の第一基本定理)」などが、仮定次第で成立する。

● uncertainty と risk : こういった手法は、真の意味での uncertainty の問題を客観的あるいは主観的確率と期待効用理論といったものを用いてある「合理性」の下で把握可能な risk の問題に帰着させようとする試みと言える。⁷

● state と確率: 共通事前確率 (common prior) 仮説 — 同一情報で同一の主観的確率を持つ Harsanyi Doctrine 主観的確率と期待効用による uncertainty 問題の risk 化 — その一方で均衡理論などにおいては確率的議論をむしろ選好の問題に帰着させてしまうこともまた可能。

● 市場:

ある日付 (あるいは date-event) において取り引き可能な商品の組み合わせの全体によって張る事のできる商品空間の部分空間を指して、その日付 (date-event) における市場 (**market**) と呼ぶ。ある理論 (モデル) において考察の対象となる market の全体を指して、その理論 (モデル) における市場構造 (**market structure**) と呼ぶ。

【 2 】 貨幣: 商品貨幣から金属、鑄造貨幣

* 「金属通貨」の時代: 「—その誇り 高さ発展系列は、コンスタンティヌスのソリドゥスにはじまり、ビザンツのノミスマ、アラブのディナールやディルハム、フィレンツェのフローリン、ヴェネツィアのダカットに引き継がれ、さらにオランダのグルデンや英貨ポンドにまで続くのである—(『経済史の理論』Hicks 1969)」

* 「手形」と「紙幣」、そして法定貨幣

※ 実物市場. 実物資産市場. 名目資産市場. 株式市場.(金融市場)

あるモデルにおいて、各主体が全ての商品に関する任意数量個の取り引きが可能であるとき、市場構造は完備 (**complete**) であると言われ、そうでないとき不完備 (**incomplete**) であると言われる。ただし、モデルの設定上 state ごとの完全予見 (将来の均衡価格が各主体により正確に予想されている) といったことが仮定されており、その予想に基づいて各人の計画が行われているような場合「そのモデルにおいては実際上それが可能である (計画段階でそうであるにすぎないのだけれど、実際にそれが実現されるし、そのことをモデル上では誰も疑っていない)」という場合も含めて、市場構造は完備であると言われることも多い。その場合、市場の完備性とは、どの単1 state についても、その state に属する全ての市場に、そしてそれらにのみ、資金を調達できる事 (従って 2 期 s states の場合には、state price が存在すること、Arrow 証券が存在すること、state に応じた資産の配当によって作られる資産配当行列のランクが s であること、等) と同じである。

⁷ リスクということについて、p.7 の脚注でも既に触れたことであるが、まさしく経済学理論は「分かる部分」でとりあえず社会を描いたものであるということである。(すなわち、本来「分かる部分」とは何なのか、そもそも確定できないということが、真の問題点なのであるが、そのことを無視している、ということなのである。「西洋人は考えられない部分は無視する。東洋人は考えられない部分から出立する。」(鈴木大拙『東洋的な見方』上田閑照による後書きより。鈴木 (1997))

市場の完備性が重要とされるのは、それが最も自由度の高い選択を各消費主体に可能とする（従って経済全体として最適な資源配分状態を実現する可能性がある）からであるが、それは場合によってはより投機的な側面を市場に呼び起こす可能性も否めない（上に述べたような完全予見に依存した完備性概念の場合、各人の予想の特殊性から定義上そのようなことが生じないとされているにすぎないのであって、ひとたび個人から予想の確実性を奪ってしまえば、将来市場を増やすことは常に賭博の機会を増やすことでもある。）いずれにせよ、不完備市場の経済学理論は、予想の問題、企業の問題、貨幣の問題、ファイナンス理論とも関連をも持ちながら、静学と動学の境界をなす社会記述上の理論の最前線に位置するものである。

※ 裁定価格: safe (riskless) assets, Arrow securities, derivative assets (e.g., options).

他の asset の returns に応じてその returns が決まるような asset を derivative asset と呼ぶ。（例: Option — 例えば、とある asset (primary asset) をその満期時点において (配当前に) x 円で買うという権利そのものを一つの asset と考えることができる — 行使価格 (strike price) x 円の (European) call option.)

(問題) 今期と来期があり、来期は 2 states とする。名目資産 (300,100) に対して、この資産を「来期その配当がもらえる直前に 240 で買うことのできる権利」(行使価格 240 の call オプションという) を考える。上記の名目資産の価格が今期 150 であり、また今期銀行にお金を預ける（もしくはお金を借りる）と 2 割の利子がつくとき、この権利 call option の価格はいくらになるべきか。

(解答) $(300, 100)a + (120, 120)b = (60, 0)$ を解いて

$$a = 30/100, b = -30/120$$

$$150 \times a + 100 \times b = 45 - 25 = 20$$

REFERENCES

Debreu, G. (1959): *Theory of Value*. Yale University Press, New Haven, CT.

Hicks, J. R. (1969): *A Theory of Economic History*. Oxford University Press, Oxford. 日本語訳: J. R. ヒックス『経済史の理論』講談社学術文庫, Tokyo.

鈴木大拙 (1997): 『新編 東洋的な見方』岩波書店, Tokyo.

浦井 憲・吉町昭彦 (2012): 『ミクロ経済学 — 静学的一般均衡理論からの出発』ミネルヴァ書房, Kyoto.